

# 美容医療における最新の動向 ～2016年を振り返って～

2016年もさまざまな学会で美容医療に関する優れた演題が数多く発表された。美容医療は患者も医療従事者も女性が多いため、自然と女性のQOLについて考える機会が多い。今回は女性のQOL改善につながる興味深い3つのテーマ「女性医師のキャリアアップ」「口唇のアンチエイジング」「女性のデリケートゾーンのアンチエイジング」についてご紹介したい。

## TOPIC No.1

### 女性医師の割合と 環境問題および昇進問題

医療における大きな問題として、慢性的な「医師不足」と「医師偏在」がある。2012年の厚生労働省の資料では、医師の総数は30万3千人で、男女の比率は男性が80.6%、女性が19.6%を占める(表1)。5人に1人が女性医師という現在、女性医師が活躍できる場の確保は、医師不足の解決策として非常に有効である。女性が働ける環境を整え増やしていくことは、国家レベルで取り組むべき

表1 医師における女性医師の  
比率(2012年)

診療科目	女性医師率
総計	19.6%
内科	16.4%
外科	7.1%
小児科	33.7%
産婦人科	31.5%
精神科	21.3%
麻酔科	36.8%
整形外科	4.4%
皮膚科	44.3%
形成・美容外科	25.9%
耳鼻咽喉科	20.0%
眼科	37.5%
泌尿器科	5.0%
脳神経外科	4.9%
リハビリ科	21.5%
放射線科	23.0%
救急科	11.5%

(厚生労働省資料より引用)

日本の喫緊の課題であるが、医師の世界でもまた同じである。

「日本皮膚科学会」では2008年から、「キャリア支援委員会(旧：皮膚科の女性医師を考える会)」、「日本形成外科学会」では7年遅れて2015年から「女性医師ワーキンググループ」が発足し、女性医師のキャリアアップ継続を目的に活動している。皮膚科医において女性医師が占める比率は44.6%、美容形成外科では25.9%で、これら2つの領域は多くの女性医師が活躍していると言える。しかし同時に、女性医師がキャリアを途絶させることが大きな損失になるとも言えるのである。

女性医師を取り巻く問題として、妊娠、出産、育児と診療業務との両立に対する非常に厳しい状況が挙げられる。女性医師が診療業務を円滑に行うには、個人の努力、夫や両親の理解と協力、および保育施設併設などの設備完備や、病院側による現実的な支援体制が必要になる。

仕事との両立を図れたとしても、実際には仕事の責務を十分に果たせない自責の念、仕事のペースダウンを余儀なくされる焦り、また自分の子供とのスキンシップの制限、夫の協力が得られない場合に起こる苛立ちなど、抱えている問題は多くある。

また、男性と同等もしくはそれ以

上に働いていても、ステップアップに疑問をもっている人も多いようである。女性医師の割合は3割を超えるが、大学附属病院の教授、准教授に占める女性の割合は、精神科、皮膚科、眼科を除くと1割に到達していない。女性医師の管理職クラスへの昇進は今後、徐々に増加することは予想されるが、いまだに多くの若い女性医師は所属施設でロールモデルに出会えていない状況である。両学会ともに、今後の活動に期待する。

## TOPIC No.2

### 口唇のアンチエイジング

筆者は、2016年6月に開催された日本皮膚科学会で、最新のアンチエイジング・リップケアとして、医薬用成分を配合した「ラシヤスリップス(LusciousLips)」の有効性を発表した。加齢により唇が薄くなった、シワが目立つ、赤みが減ってきたなど、唇に関する悩みは多いが、それをヒアルロン酸注射ではなく、リップグロスで手軽にケアできると話題になっている。

口唇の特徴として、まず皮膚に比べてバリア機能が低いことが挙げられる。唇は角質層が薄く、メラニンもない。また、皮脂腺・汗腺がないため、皮脂と汗からできる保護膜「皮脂膜」も作れない。つまり、潤